

普遍の問題

——プラトンの見解とアリストテレスおよび

現代分析哲学者たちの諸見解との比較——

浅野 檣 英

はじめに

ボルピュリオスの『アリストテレスのカテゴリア入門（エイサゴーゲー）』の冒頭に、その解答については保留されたままで提起された哲学史上有名な普遍の問題をめぐって、中世において普遍論争がなされたことは周知のとおりである。そして、その問題にどう解答したことになるかによって、普遍についてのさまざまな見解が実在論と唯名論あるいは概念論とに分類されている。しかし、「多くのものに共通な或る同一のもの」をイデアとして自らの哲学理論の核心にすえたのは、いうまでもなくプラトンであった。したがって、一般に普遍の問題ははじめはイデア論の問題であったと言えるであろう。これについては、プラトン自身が、イデアは一方では感覺されるものから離れてそれ自体で存在し、他方では感覺されるものはイデアを分有するものであるということをいかに整合的に説明するかをめぐって、『パルメニデス』(30a—135c)で六項目の問題点を指摘したのであった。その後、アリストテレスが、プラトンのイデアを「数多くの事物に共通に述語づけられるもの」としての普遍にほかならないと解した上で、普遍は実体ではなく第一義的に存在するものではないということをも一つの理由として、イデア論を否定したので

るものかそれとも感覚的事物のなかに感覚的事物にまつわって在るものか。」これはポエティウスのラテン語訳をおして広く中世に伝えられたと言われる。

(2) これらの問題については、四で論じる予定である。

(3) cf. Aaron, R. I. "The Theory of Universals" 2nd, ed. 1967, pp. 12-13.

(4) Nagel, E. & Brandt, R. B. (ed.) "Meaning and Knowledge"——Systematic Readings in Epistemology——1965, p. 256; Hospers, J. "An Introduction to Philosophical Analysis" 2nd ed. 1967, p. 360.

(5) アリストテレスが『第三の人間』に言及してゐるのは、*『中略』*の箇所である。Met. A9, 990b 15-17 [=M4, 1079a11-13] *αὐτῶν τῶν ἀποδείξεων* Alex. Aphr. in Met. 84. 21 ff. [W. D. Ross (ed.): Aristotelis Fragmenta selecta, *περὶ ζῴων* 4 所収 p. 126]; Met. Z13, 1038b34-1039a3; Sophistici Elenci (22) 178b36-410.

アリストテレスによれば (*περὶ ζῴων* の上掲箇所)、『第三の人間』の論証とは *ζῴων* のとおりである。「もしも数多くのものに正しく述語となるもの(カテコルーメン)が、主語となる諸々のものとは別のもの、つまり、それら主語となるものから離されてあるもの(ケコーリスメン)であるとするとするならば「中略」或る第三の人間が存在することにならう」すなわち「もしも述語となる人間が主語となる諸々の人間たちとは別のものであり、固有に独自に在るもの (*κατ' ἰδίαν υφ' ἑαυτῶν*) であり [Parm. 132a1—as に対応]、しかも人間は個別的な人間たちのもとにも人間のイデアのもとにも述語づけられるとすれば、個別的な人間とイデアとのほかに或る第三の人間が存在することになる [Parm. 132a5—a11 に対応]。このようにして、さらにこの第三の人間と人間のイデアと個別的な人間たちのもとに述語づけられる第四の人間が存在することになり、同様にして第五の人間もまたということになり、このことは無限にいたる [Parm. 132a11—b2 に対応]。かくして、それぞれのイデアは一つでなければならぬのに、それぞれのイデアは無限に在ることになって、イデアはそれぞれ一つだというイデア論の主張はなりたたなくなるといふわけである。

一 プラトンの名前の理論

主として『クラテュロス』によって、名前についてのプラトンの理論を明らかにする。

一・一 名前の役割

プラトンにとっては、名前とは諸々のものの在り方を教示し識別するための道具である (Crat. 386b—c)。したがって、名前には正しさがある、その正しさとは「諸々の在るものそれぞれがいかなるものであるかを明らかにすることが出来る」(同上 425d, cf. 428e) という点に求められる。このような観点からかれは名前についての極端な規約説をつぎのように批判する。ただし名前の規約的性格を全面的に否定しているのではない。

一・二 極端な規約説への批判

① 諸々の動作アクションをするものも動作アクションもわれわれの表象表象から独立に存在し、それ自体一定の在り方をおびている (Crat. 386d—e)。それゆえ、われわれが或る動作をなそうとする場合、任意の仕方仕方で任意の道具を用いてその動作をなすことができるのではない。われわれはその動作と動作を受ける対象の本性本性にしたがってふさわしい道具を用いて動作するのでなければ、成功しないであろう (同上 387a—d)。

② しかるに言明レクシオンすることも名前をつけることもひとつの動作である。したがって、われわれは、名づけるという動作と名づけられる対象の本性にしたがってふさわしい道具、つまり名前を用いて名づけをなさねばならない (同上 387b—d, 388a)。そして、名づけるという動作の本性は、諸々のものの在り方を互いに教示し識別するということがかならない (同上 388b)。

③ 規約と合意のほかになにか名前の正しさがあるのではなく、名前はそう名づける人々の規則と習慣によるのだ (同上 384e—f) という規約説を徹底して、もしも或る人がそれぞれのものを名づけるとそれがそのものの名前であり (同上 385a)、したがってそれぞれのものには異なった名前をつける個人の数だけ名前がある (同上 385c) というならば、われわれは諸々のものの在り方を教示し合い識別するということに成功しないであろう。

一・三 自然的言語の多様性についてのプラトンの説明

ところで、プラトンは事実上自然的言語においては、同じ対象の名前としてたとえばギリシア語の名前と異邦語の名前とがあるということを、どう説明するか。

まずそもそも名前は誰がつくるとプラトンは考えているのか。一般にそれぞれの道具は任意の人によってつくられるのではなく、その道具をつくる技術をもった専門家によってつくられる。それと同様に、名前という道具もまた名前作りまたは規則制定者と称される専門家によってつくられるはずである (Crat. 388c—389a)。けれども、プラトンによれば、諸々の国にそれぞれの名前づくりがあっても支障とはならない。名前作りとしてかれが想定しているのは、言語の権威者ではあるけれどもやはり人間であって (同上 388d—389a)、神とかダイモーンとかの神的な権威者ではないのである (同上 438c)。

プラトンが名前作りの資格として要求するのは、「それぞれのものに本性的である名前を、声と綴りとのなかに制定する仕方を知っており、名前であるもの自体を見定めてすべての名前をつくり制定する」(同上 389c) ことができるということだけであって、それぞれの名前作りが名前そのものを同じ音節^{シユラベ}のなかに制定しないと、支障はないのである。そして、つくられた名前が、存在する諸々のものの本性を明らかにする道具、諸々のものの在り方を教示し識別するための道具として適切につくられているかどうかを判定するのは、それを使用する哲学者・科学者^{ディアレクテイコ}である^イとされる (同上 390b—d)。⁽¹⁾

名前を制定する仕方として、プラトンが基本的とみなしているのは、ちょうど音楽や絵画が諸々のものの音とか形態とか色とかを模倣するように、文字や音節によって諸々のものの在り方を模倣することである——たとえば流れるものを ρ という字母で模倣するように (同上 426d)——けれども、規約的^イとみなさざるを得ない名前、たとえば数の

名前もあることをみとめている(同上 435b)。このように、かれは声や文字としての名前にかんしては個人的規模での規約説を承認しないが社会的規模での規約説を承認しているのである。

一・四 アウト・ホ・エスティン・オノマ
名前そのもの

以上のように、プラトンは文字や声としての名前にかんしては常識的な形で規約説をみとめているが、名前そのものにかんしてはそうではない。いったい名前そのものとはなにを指すのであろうか。この点についてはプラトンは『クラテュロス』では直接にも語っていない。けれども名前そのものといっても、それは名前であるかぎり、名づけられた対象ではない。「名前と名づけられたものとは別々である」(同上 435c)といわれるとおりである。しかしまた声や綴りのなかに制定された名前でもない。それはやはり名前のアイデアと解するべきであらう。

一・五 オノマゼイン
名指しの対象

さて、名前によって名指される対象とはなにであるか。プラトンによれば、その対象は「つねに存在する本来的なもの」(Craft 397b)¹。「それぞれのもの自体、実在、ウインデ」[中略]「それぞれのものがそれであるところのもの」(同上 435c)²であるとされている。これらの表現は、プラトンがアイデアを一般的に表現する場合の慣用語であらう。他方、ゴト 感覺的事物は、それぞれのアイデアを分有することによって、そのアイデアと同じ名前と呼ばれるようになる³。感覺的事物は名指しの第一次の対象ではなくして派生的対象にしかすぎないのである。そして、名前そのものは、感覺的事物がそれを分有することによってそれと同じ名前で呼ばれるようになるアイデアのいわば「論理的固有名」⁴とも解せられる。⁵

プラトンのアイデアはそれ自体であり恒常不変にして一なるものである。⁶ その名前も本来は一つしかないはずである。

ところで、それぞれのイデアは多くの感覺的事物に分有されるのであるが、それら多くの感覺的事物はそれぞれ一つのイデアだけを分有するのではなく多くのイデアを分有する。したがって、それぞれの感覺的事物は本来多くの呼び名をもつのである。

フレーゲが意味 (Sinn) と指示 (Bedeutung) とを区別して以来、現代分析哲学では、普通、名指しまたは指示 (naming, reference) の対象は個体であり、意味 (meaning) の対象はその存在論的身分にかんする論争は別としてなにか普遍的なものであるとされている。ところが、プラトンは、特に名指しと意味との上のような区別を立てていないばかりでなく、名指しの対象はまずイデアであるとみなす。このようなプラトンの方策は、きわめて論理的な要請にしたがったものであるように思われる。たとえば、或る感覺的事物を美 (美しいもの) と名づけるとしよう。しかるにその事物は、或る面ではとか或る時にはとか或る関係ではとか或る人々にとってはとかいうように或る場合には美しいが、他の場合には醜いというような事物なのである (cf. Symp. 211a, Crat. 439a)。もしも、或る対象を一つの名前で呼ぶならば、その対象はつねにその名前で呼ばれるものでなければ、プラトンが名前をそのための道具とした仕事するのに理論上不都合なのである。しかるに、「決して同じ状態を維持しない」(Crat. 439e) ような感覺的事物は、この厳格な論理的要求に適合する対象ではない。かれが、美や善や大などそれぞれの名前でつねに呼ばれる純粹にそれ自体であるイデアなるものを自らの哲学理論のもっとも重要な仮定としてたてる (Phd. 100b) のも、これと無関係ではない。他方ではまた、日常言語においては、或る感覺的事物を美と呼んでいる事実をものならかの仕方では説明しなければならない。かれは、これを感覺的事物によるイデアの分有、共有などといういわば無定義用語あるいは原始記号 (primitive symbol) とでもみなさるべき用語を用いて説明しようとするのである (Phd. 100c—d)。

プラトンが存在という名前の指示対象としてまず存在というイデアを立て、ついでその名前をば存在を分有する諸語のイデアに適用し、そしてまた存在を分有する諸々の感覺的事物に適用するような仕方では理論を展開するのも、や

はり論理的要請によるものであると思われる。かれにとつては、つねに生成消滅する感覺的諸事物を存在という名前の第一次の指示対象とするのは、「存在」を「恒常不変」ということの厳格な意味で用いるかれの用法からすれば、論理的に適切でないからである。プラトンの存在論のうちには、エレア派の影響を勘定に入れると、このような論理的意識が強く働いていたと思われる。存在するものはまず感覺的事物であるといわれわれの日常的感じにかなった常識的観点からみれば、イデア論は非常識的観点をとっているといえる。しかし、プラトンはその観点を敢えてとつてゐる。

(1) クレツマンが言うように (Kretzmann, N. "History of Semantics" *Encyclopedia of Philosophy* Vol. 7 (pp. 358-406) p. 361)「実際、馬や牛に対してひとつの名前だけしかなく、馬に対してひとつの名前がなく、「脚」「頭」「尾」など順序の無差別な一連の名前だけしかないとかいう場合、知識ある人々の批判を受けて、名前作りは、改めて名前をつくらねばならないだろう。田中美知太郎全集第一巻—ロコスとイデア—一八九頁をも参照。

(2) たとえば、Phd. 65d-e, 75d, 78d etc.

(3) プラトンの言う感覺的事物、つまり感覺されるもの (アイステートン) のなかに、さらにアリストテレスの实体と属性との存在論的区別につらなる事物 (thing) と特性 (property) との区別を持ち込むべきではない。プラトンが存在論的に区別してゐるのは、アイステートンとノエーション (思惟されるもの) とつてのイデアだけである。G. Vlastos ("The Third Man Argument in the 'Parmenides'" 1954 & "Addendum" 1963—R. E. Allen (ed.) *Studies in Plato's Metaphysics*. 1965, pp. 231-263, 再録) は、プラトンが事物と特性との区別をしることによって、感覺的事物とイデアとの存在論的区別を立ててしまつたことを、一つの難点とみとめるのであるが、イデア論の枠組では事物と特性との区別を立てる必要はないであろう。

(4) 感覺的事物は、それが分有するイデアと「同じ名前をもつもの (ホモニユモン)」である (Phd. 78e)。「それぞれのイデアが存在し、そしてほかの事物はこのイデアを分有することによって、それにちなんだ名前 (エホーニユミア) をたずねる」 (Phd. 102b)——なお Parm. 130e-131a においてホモニユミアとどう表現を用いて同様のことが述べられてゐる。「イデアそのものが恒常的に自分の名前前で呼ばれる資格があるだけでなく、さらに別のもの——イデアそのものではないが、在るかぎりにおいてつねにイデアのもつ性格 (モルペー) をもつもの——もまた「イデアのもつ名前で」呼ばれる資格がある」 (Phd.

- 103e)。「われわれは既に各種を適用する多くの各ツールに對つたこの「イデア」を「われわれ」(Rp. X 596a)° cf. Allen, R. E. "Participation and Predication in Plato's Middle Dialogues" 1960,——R. E. Allen (ed.) *Studies in Plato's Metaphysics* 1965, pp. 43-60 再録 p. 45.
- (e) cf. Kretzmann, *ibid.*, p. 361.
- (e) *Symp.* 210e-211b, *Phd.* 78d, 100b, Rp. 476a, 597b-c, *Parm.* 130b, 131a-b.
- (7) Frege, G. "Über Sinn und Bedeutung" 1892—G. Patzig (Hg.) G. Frege, *Funktion, Begriff, Bedeutung* 1962, S. 38-63. 再録
- (8) ただし「ミヤヤ」の区別と反對に「On Denoting" 1905—R. C. Marsh [ed.] *Logic and Knowledge*, 1956 pp. 39-56 再録—p. 50)° 指示だけで処理したとある。タフマンの「ミヤヤ」の見解を指示と意味との混同として批評している ("Russell's Ontological Development", R. Schoenman (ed.) B. Russell • *Philosopher of the Century* 1967, pp. 304-314 所収 p. 309)° 意味と「自身」自身は「意味と」の存在を承認してはならない ("From a Logical Point of View" 2nd ed. 1961, p. 11)°
- (9) 後述「二・一」を参照。なお、存在のイデア以外の諸々のイデアは「存在」という名前の第二次的指示対象として「この派生的指示対象としての感覺的諸事物から区別すれば、われわれにとっては議論がより明確になるだろう。
- (10) G. Vlastos に「われわれ」(ibid., p. 246)° 「ソクラテスの「Xは存在する」の厳密な意味は「Xのとおりであると指摘される。
- (i) Xは思惟されるものである(感覺されるのと対立) [E. g. *Phd.* 65cf, Rp. 509df, *Tim.* 51b-c]
- (ii) Xは恒常不変である [E. g. *Crat.* 439df, *Phd.* 78df, Rp. 484b, *Phil.* 59a-c]
- (iii) Xは反對の述語で性格づけられる [E. g. *Phd.* 74c, Rp. 479a-c, 523bf, cf. *Ep.* VII. 343a]
- (iv) X自体は「X」が内包する特性の完全な実例である。
- 私は、(i)と(ii)には同意する。さらに、(iii)にも、述語をアリストテレスのいうような実体の属性を表わすものと解さないという条件つきでならば、同意する。しかし、(iv)にはまったく賛成できない。テキスト上の根拠もないし、またこのようなイデア論解釈では、結局、イデアはアリストテレスの属性によっておきかえられるような集合と解されるべきものであり、イデア自体は自分自身の完全な成員と解されるということになってしまふ。しかし、「プラトン自身は、イデアをこのような仕方では理解すれば、イデア論は不合理になることを『パルメニデス』(132a-b)で論証しているのである。そして、この論証の意図は、イ

デアをどのように理解することを禁じることにあつたと解することができるのである。なお、註4および後述、四・一1および四・一二を参照。

二 諸々のイデアの組み合わせ

『ソピステス』(351d—259e)⁽¹⁾において、プラトンは「われわれの言明は諸々のイデア相互の組み合わせによってなる」(259e) というテーゼを確立するための議論を展開している。「われわれは、それぞれの場合に同じ事物をいっただいという仕方で多くの名前前で呼ぶのかを語ろう」(251c)。たとえば「われわれは人をただ人間であると言うだけでなく善くあるとかそのほか限りのないものであると言う。そして、そのほかの事物についても、同じ理由で同様にして、それぞれの事物を一つと仮定しておきながらもその事物を多として多くの名前前で語るのである」(251a—b)。そして、このようにいわば日常言語的言明の成立を保証するものとして、それにつづく箇所ではイデア相互の組み合わせの成立が示されるのである。

プラトンははじめに諸々のイデアのうち或るものどもものあいだには分有(メテケイン、メタラムバネインなど)、共有(コイノーネインなど)あるいは結合(シユムメイグニユスタイなど)といった組み合わせがなりたつが、或るものどもものあいだではそうではないということ論証(351d—259e)したのち、例として、存在^{オン}、動^{キネイシス}、静^{スタシス}、同^{タウトシス}、異^{ヘテロン}という五つの包括的イデア(ゲノス)⁽²⁾を選んで、それらの相互関係を明らかにしようとする(254b以下)。

この章では、もっぱらイデア相互の諸関係の論理的特性が分析され、その関係が実質的にはいかなるものであるかについては、四章において明らかにする予定である。

二・一 五つの包括的イデアの相互関係

五つのイデアのうち、動と静とは結合しない (254d¹-e)。その理由は、すべてのものが相互に共有すること、したがってまた動と静とは共有すること、を否定するためにあげられた理由——「動が静止し、静が運動するのは不可能である」(252d)——と同じであろう。しかし、存在は動とも静とも結合する。なぜなら、両者は在るからである(254d¹)、つまり「動が在る、静が在る」と言うのは、両イデアがそれぞれ存在を分有するという事態の表現とされる(251e¹-252a, 256a, 256d)。さらに、存在と動と静とのうちそれぞれは、他の二つのイデアとは異なり、またそれぞれは自らと同じである (254d¹-1s, 255e¹-1s, 255e, 256d¹)。

こうして同と異というもう二つの包括的イデアが立てられる。プラトンは動も静も異であらぬし、また同であらぬしと(255d¹-s, 256a¹, 256a², 256b², 256c¹-e)を論証するとともに、「動は自らと同じである」と言うのは動が同を分有するという事態の表現にほかならないし、また、「動が自分以外のものと異なる」と言うのは動が異を分有するという事態の表現にほかならないとし、静についても同様であるとす (255b², 256a¹, a²-b¹, 256b¹-s, 256c¹-e)。さらにまた、存在は同と一つではない (255c)——存在は同ではあらぬ——ということ論証するとともに、「存在は自らと同じである」と言うのは存在が同を分有するという事態の表現にほかならないとする。すべてのものは同を分有することによって同である (256a¹) というわけである。

ついでプラトンは存在は異ではあらぬことを論証する。その論証は「存在するもののうち、或るものはそのそれ自体で言明され、或るものはつねに他のものとの関係で言明される」(255c¹-1s) ということを前提として、「異はつねに他のものとの関係で言明される」(255d¹) がゆえに、存在は異ではあらぬというものである。⁽⁴⁾しかしまた異は存在を分有してその分有によって在る (259a¹-n)。他方、存在もまた異を分有する、というのは存在は自分以外のものとは異なるからである (259b¹-e)。そもそもすべての包括的イデアのそれぞれ一つのもものが、他のものどもと異なるのは、自らの本性によってではなくして異のイデアを分有するからなのである (259e¹-e)。

以上のことをまとめると、つぎのようになるであろう。

- (1) 動と静とは結合も共有もしない。
- (2) 動と静とは、それぞれ、存在、同、異を分有する。
- (3) 存在、同、異は相互に分有する。

二・二 在らぬものという語のプラトンによる用法

プラトンは『ソピステス』(258a以下)において、在らぬものという語のかれによる用法を明らかにする。かれの存在論がパルメニデスの「在るものは在り、在らぬものは在らぬ」という存在論と異なる重要な論点は、在らぬものも或る意味では在ると考える点にある。この考え方は、在らぬものという語の用法を二つに区別することによってなりたつ。

「在らぬもの」は一方ではまったく在らぬもの、なにもものでもないものを表わすのに用いられる。この場合、在らぬものについて言明することがそもそも不可能なのである。というのは、この場合の在らぬものはまったくいかなる規定をも受け容れないからである。それゆえ、このような在らぬものについての言明は「なにも語らぬこと、まったく言明しないこと」にほかならない(以上258a-c)。そこで、このような在らぬものについてはいかなる言明もなりたちそうもないので、プラトンはこれにはかわりをもたないことにする(238a—239c)。

プラトンは、他方では「在らぬもの」を異を表わすものとして用いる。「存在に対立する異の本性のそれぞれのモリオン⁽⁵⁾こそまさしく在らぬものである」(258e)と考えるわけである。一般的に言えば、否定詞が前につけられた名前⁽⁵⁾、「非(不) — α」は、αという名前がつけられたもの以外のなにかを指示するにすぎないのであって(257b—c)、在らぬものは在るものとは逆のものではなく、在るものとは異なるなにかを指示するにすぎないのである。

だから、たとえば、動は存在を分有するかぎり在るのだけれども存在とは異なるかぎり在らぬものである(256c)。同様に、在らぬはすべての包括的イデアにおいて在る。というのは、すべてのイデアは、存在を分有するかぎり在るが存在とは異なるかぎり在らぬからである。このように存在も在らぬもの||異も、それ自身は一つのイデアであるが、多くのものがそれらを分有するかぎり多くある(256d—e, 257c—d)。

プラトンは、いまいった事情を、異についても少し詳しく語っている。たとえば、知識は一つであるが、知識の部分メロスがそれになるところのものはそれぞれ切り離されてなにか固有の呼び名プロイニクミヤをもつ。同様に、異もそれ自体は一つであるが、その諸々のモリオンはそれぞれ固有の呼び名をもつのである(257c—d)。たとえば、存在している美トイカロンには異の或るモリオンが対立アンテイテイテノンして在る。このような美の本性とは異なるものをわれわれは非—美トイメーカロンと呼ぶ(257d)。存在するものに対する存在するもの或る対立アンテテシズが非—美なのである。したがって、美も非—美も存在に属しているという点では相違はない(257e)。このことは、大と非—大についても、正義と非—正義についても、同様である。というのも、異の本性は存在しているのだから、その諸々のモリオンも存在しているとするのは必然だから(258a)。

二・三 諸イデアの組み合わせ関係の特性

以上の要約のなかでは、コーンフォードなどの研究者の普通のやり方にならって、イデアの組み合わせ関係の表現として主に結合、共有、分有をとりあげて述べてきた。しかし、プラトンは、イデアの組み合わせを表現するのにこれら三種類(6)の表現だけを用いてのではない。それゆえ、ここではほかの表現のうち重要と思われるものをも含めて、それら諸表現によって表わされる組み合わせ関係の特性を、つぎに明らかにしよう(7)。

① 結合(与格を伴った共有を含めて〔注6参照〕)という関係は、まず非反射的(irreflexive)であると解すべきである。プラトンは、或るイデアがその当のイデアと結合する、たとえば存在のイデアが存在のイデアと結合する、

というように解されうるようなことはどこにも語っていない。仮にまたそういう事態が成立したとすれば、存在のイデアは二つあることになり、『国家』(397c)になぞらえていえば、またもやもう一つの存在のイデアが現われてきて実はそれこそが存在のイデアであるということになる、とプラトンは主張するであろう。つぎに、この関係は対称的 (symmetric) である。さらにこの関係は移行的でない (non-transitive)。たとえば、「動は存在と結合し、存在は同と結合するならば、動は同と結合する」ということは言えたとしても、「動は存在と結合し、存在は静と結合するならば、動は静と結合する」ということは言えないからである。

② 分有 (属格を伴った共有を含めて〔注6参照〕) という関係は、結合と同様、非反射的である。つぎに、この関係は対称的でない (non-symmetric)。たとえば、存在は異を分有するという事態は「存在は自分以外のものと異なる」という言明で表現される。そして、これは「異は在る」という言明で表現される異は存在を分有するという事態を論理的に含意しているわけではない。実際、プラトンは、動は存在を分有するとは言っても、存在は動を分有するということのようなことはどこにも言っていないのである。さらに、この関係は移行的 (transitive) である。

③ 分有とは逆の関係の表現として、包括 (包括) 総括 (総括) が見出される。この表現は、哲学者が自らの任務として解明しなければならぬ事柄として語られているつぎの箇所にてでくる。「すべての包括的イデアにわたってそれらを総括するなにもかが在る」(253c)。「一つのイデアがそれぞれ一つ一つ離れている多くのイデアにわたってあらゆるところに配分されていて、相互に異なる多くのイデアが一つのイデアによって外から包括されている。反対にまた、一つのイデアは多くのイデア全体によって一つに結びつけられていて、多くのイデアは離れてまったく区別されているのである」(253d)。

④ 分有と同じ関係の表現として、ほかにもう一つ「のモリオンである」がみとめられる。〔注5参照〕

⑤ 諸イデアのヒエラルキーにおける上下関係を示唆するものとして、つぎの箇所を指摘しておく。「諸イデアの

うち、或るものどもは相互に共有（＝結合）しようとし、或るものどもはそうではない。また或るものどもは少しのもの、或るものどもは多くのものと共有（＝結合）しようとする。さらに或るものどもはすべてのものにわたってすべてのものと共有（＝結合）していることをなにもも妨げないのである」（354b—c）。

われわれは『国家』第VI巻（509c—511e）のいわゆる線分の比喻と称される箇所において、プラトンがアイデア界におけるなんらかの形でヒエラルキーをみとめていることを見出すであろう。これを念頭において考えれば、すべてのものと結合する、もっと規定的に言えば、すべてのものを包括する、ようなアイデアはもっとも上位のアイデアであり、そして、より多くのアイデアを包括するアイデアとより少しのアイデアを包括するアイデアとのあいだには上下関係がみとめられるであろう。

二・三一 諸関係のあいだの論理的関係

① アイデア α がアイデア β を分有するか、あるいは、 α が β を包括するということと、 α は β と結合するということとは等値である。

② α は β を分有するということと α は β のモリオンであるということとは等値である。

③ α は β を包括するということと β は α を分有する（のモリオンである）ということとは等値である。

④ α は β を包括するならば α は β より上位であるということとはなりたつが、 α は β より上位であるならば α は β を包括するということは必ずしもなりたない。たとえば、動は坐やすのアイデア（もしこんなアイデアがあるとなれば）よりも上位であり、静は走はしのアイデアよりも上位であるとしても、動は坐を包括しないし、静は走を包括しないであろうから。かくして、 α は β を包括するということは、 α は β より上位であるということとを条件づける（含意する）。

⑤ ④と同様に考えて、 α は β を分有するということは、 α は β より下位であるということとを条件づける。

⑥ 相互分有とか相互包括は同位であることを条件づけるが、同位であることと等値ではない。たとえば、動と静とは同位であると考えられるが、両者は結合しない。

二・四 イデア相互の組み合わせと感覺的事物によるイデアの分有との相違

諸イデアの分有などという関係と感覺的事物によるイデアの分有という関係とは、つぎの点で明確に区別されねばならない。それは、諸イデアの関係は永遠不変な絶対的關係として成立していなければならぬのに対して、事物がイデアを分有するという関係はそうではなく一時的相對的にしか成立しないということである。いま、イデア α 、 β 、 γ について、 α と β とが結合しないならば、 γ が α を分有する場合には、 γ は永遠に β を分有しない。しかるに、 α と β とが結合しないとしても、或る場合に α を分有する事物 a はまた或る場合には β を分有することも可能なのである。たとえば、テアイテストは動のイデアを分有して動くこともできれば、静のイデアを分有して静止することもできる。われわれがもしもプラトンのイデア論におけるこのような区別をみとめないならば、イデアを分有する感覺的事物もまた恒常不変でなければならないことになる。しかし、これはまさしくアトポン (absurd) である。⁽⁹⁾

(1) 以下、二章において記されるプラトンのテキストからのページづけは、すべて特に断わりがないものは『ソピステス』のページを示す。

(2) ゲノスはアリストテレスの用語としての類とは、のちに明らかになるように、まったく異なった意味で用いられている。ここでは、誤解を避けるために、包括的イデアと訳しておく。

(3) プラトンは事態とそれを表現する言明とを、さほど explicit に区別して語ってはいないと見られるかも知れないが、言明はイデア相互の組み合わせによってなると言われているのだからして、イデアの組み合わせは、それに対応する言明の成立を保証する事態として、言明から区別しておくことは、プラトンの意図に沿うであろうし、またそうすることは、プラトンの言明理論、ひいてはイデア論をより明瞭に理解するために有用であると思われる。

- (4) 言い換えれば、存在は《その自己自体》という形相と《他との関係》という形相の両方を分有するのに対して、異は《他のものとの関係》という形相だけを分有するのである (255d₁₋₂, 258a₁₋₂)。
- (5) 251d-259e のあらたな「イデアにかんしてモリオン (*μόριον*) という語は 257d₁, 258a₁, 258e₂ の五箇所に現われ、B. Jowett (*Dialogues of Plato*, Vol III 4 th ed. 1953), H. N. Fowler (*Loeb Classical Library*, 1921), F. M. Cornford (*Plato's Theory of Knowledge*, 1935) など、メロス (*λέρος*) は「part」と翻訳するのと同様に「モリオン」も「part」と訳してゐる。A. Dies のフランス語対訳 (1925) ではまた 258e₂ の「fraction」と訳すほかはずべて「partie」が用ひられてゐる。あらたに最近出版された R. Wiehl のドイツ語対訳 (*Philosophische Bibliothek*, 1967) ではまたすべて「Teil」と訳されている。しかし「のち」(四・一二〇③) 明らかとする理由によつて「イデアのモリオンをメロスと同様に「部分」と解したならば、イデア論は不合理となるのである。ここではギリシャ語のまま「モリオン」としておく。(6) 目下取り扱っている『ソピステス』(251d-259e) におつて「結合・共有」という表現で表わされるイデアの組み合わせ関係の特性にかんしては、このさうな解釈の相違がみられる。F. M. Cornford (*ibid.*) によればこれらはいずれも同義で、「この関係する (to have relation with)」(p. 255) という対称的な関係を表わすと解される。かれがこのような主張をする一この意図は「イデアの関係は、対称的でないのではなく、したがつてアリストテレスの論理学における主語と述語とのつなぐと考へられる連辞 (copula) に相類するものである」といふことにある (pp. 257, 278, 296)。これに対つて J. L. Ackrill (*Plato and the copula: Sophist 251-259*, 1957=R. E. Allen (ed.) *Studies in Plato's Metaphysics* 1965, pp. 207-218. 再録) は「コイノーネーシス etc. という表現は W. D. Ross の調査 (*Plato's Theory of Ideas*, 1951, p. 111, n. 6) ——コイノーネーシス etc. という表現が属格を伴つて用ゐられる場合には「分有する (share in)」という意味で、他方、与格を伴つて用ゐられる場合には「共有する (combine with, communicate with)」という意味である——を踏まえて、ならにメテケイシス etc. という表現が用ゐられている箇所についての調査をもつて加えた上で「このような結論をひきます。すなわち、結合および与格を伴つた共有という表現は対称的關係を、分有および属格を伴つた共有という表現は対称的でない關係を表わすという。(以上のことについては私もマツリル説に同意である。) マツリルは明らかにその上、後者は連辞 (copula) に相当すると解するのである。(以上 pp. 216-218)。」といふこの連辞は「…が…の…を含む (falls under)」という意味であると説明するにあつて「かれは G. Frege の論文 (*Über Begriff und Gegenstand*, 1892=G. Patzig (Hg.): G. Frege, *Funktion, Begriff, Bedeutung* 1962, S. 64-78. 再録) ならぬ (S. 66) によつて (p.

210) からは、それは、現代論理学における主語—述語関係あるいは集合論における成員関係 (membership) ないし包含関係 (inclusion) に帰着することになる。しかし、プラトンの分有という関係をこのような仕方では理解し、イデアをアリストテレス的な普遍 (属性) に相当するものとみなすならば、イデア論は不合理となるであろう。

(7) 以下は、アクリル説のうち、私が同意できる (註6をみよ) イデアの組み合わせ関係の特性についてのかれの分析を踏まえて、さらに多くの補足をつけ加えたものである。なお、この補足をするにあたっては、B. C. V. Fraassen の論文 (“Logical Structure in Plato’s Sophist” The Review of Metaphysics Vol. XXII, No. 3, 1969, pp. 482-498) が刺激になったが、たとえば、結合という関係を反射的であるとみなしたり、イデアの組み合わせ関係のなかに様相的關係 (結合可能 || 共有、という關係) をみとめたり、モリオンをメロスと同じく「部分 (part)」として理解したりしてゐる点と (pp. 483-4) 議論の出発点で、私とは見解を異にする。

(8) 《*Idon tôtan ôta nothôy, êvds êktôrou keshôu youtôs*》。この句は、あの註10で問題とされる句である。

(9) α と β が結合しないかあり、たとえ事物でも、その事物が、同じもの (部分) におじて、 α でありながら、同時に β であることは不可能とされている点で、やはり、事物によるイデアの分有は、諸イデアの組み合わせによって制限されていることに注意しなければならぬ。「同じものが、その同じもの (部分) におじて、しかも同じものとの關係で、同時に逆のこと (例、動と静) をなしたり、なされたりすることはあなう」(Rp. 436b, cf. 436c-e) のである。

(10) 以上のような観点から、私は E. W. Schipper (“Forms in Plato’s Later Dialogues” 1965) の α のような見解には同意せぬ。かれは W. G. Runchmann (“Plato’s Later Epistemology” 1962, p. 62) と α の β の註6に記した句のなかの “nothôy” はイデアではなく事物を指示するのだと解釈すべきこと (p. 37) などを理由として、『ソピステス』では、プラトンはもはやイデアと感覚的事物とを存在論的に区別する考えを放棄してゐるのだと主張する (p. 37)。“nothôy” を感覚的事物を指すと解釈する理由は、“*tôtan*” が女性名詞であるのに、“*êvds êktôrou*” は中性形で書かれているからだという点にある。しかし、一般に、それぞれのイデアの名前は女性名詞でなければならぬとは言えないのだからして、かれの理由は薄弱であらう。

三 論理的 一般 (普遍) 名辞と日常言語の一般語

ここでは、いちどプラトンのイデア論から離れて、別の観点から、述語論理学および集合論の述語や集合に相当する論理的な一般名辞と、普通名詞や形容詞や動詞などに相当する日常言語の一般語との相違を明らかにしておく。このためになされる議論はイデアなるものをより明確に理解するためにもまた有用となるはずである。

三・一 アリストテレスの普遍論

① アリストテレスの『Analytica Priora』のシュロギスモスの体系には、個別(単称)的言明は組み入れられておらず、⁽¹⁾ 全称的言明、特称的言明、不定称的言明が組み入れられているわけである(An. Pr. A1, 24a17-20)。したがって、かれのシュロギスモスの体系は、種とか類とかなど諸普遍の論理的関係を記号的に体系化したものであって、そこでは主語の位置にくるものも述語の位置にくるものも普遍名辞である。そしてかれによればたとえば全称的言明はつぎのように定式化される。「 B ⁽²⁾ (例、動物) はすべての A (例、人間) に属する」⁽³⁾ 」「 B はすべての A のもとに述語づけられる」⁽⁴⁾ 」「 B は A 全体のなかに在る」(An. Pr. A1 & 2, esp. 24a18, b26-28, 25a25-26)。けれども、シュロギスモスの体系のなかには組み入れられていない個別的言明もまた『カテゴリアイ』や『De Interpretatione』では論理的および存在論的研究の対象になっているのである。ところで、アリストテレスによれば、普遍と個別とはつぎのように定義されている。「私が言う普遍とは本来数多くのものに述語づけられるものことであり、個別とはそうでないものことである。たとえば、人間は普遍であり、カリアスは個別である」(De Int. 7, 17a39-b1)。それでは、アリストテレスによれば、普遍⁽⁵⁾ 述語となるものとはどのような対象か。

② かれは『カテゴリアイ』(2, 1a20以下)において、存在するものどもをつぎの基準によって分類している。かれは、種や類(普遍)(例・「人間」、「白」)を個別(例・「この人間」、「この白」)から区別する基準として「或る基体〔主語的存在〕のもとに語られる〔述語づけられる〕」か否かを立て、さらに性質や量などほかのカテゴリの

もの(例・「この白」、「白」)を実体のカテゴリーのもの(例・「この人間」、「人間」)から区別する基準として「或る基体のなかに在る」或る基体に属する「或る基体から離れて在ること不可能」か否かを立てているのである。これらの基準によって、かれは、存在するものをつぎの四つのグループに分ける。⁽⁸⁾

- (a) 実体のカテゴリーにおける種や類、例・「人間」。
- (b) 実体以外のカテゴリーにおける個別、例・「この白」。
- (c) 実体以外のカテゴリーにおける種や類、例・「白」。
- (d) 実体のカテゴリーにおける個別、例・「この人間」。

(以下、この②では、(a)、(b)、(c)、(d)によって、各グループのものを表わすことにする。)そして、かれは、(d)を「或る基体のもとに語られるものでも、或る基体のなかに在るものでもない」という仕方で第一義的に存在する第一実体と呼び、(a)を第二実体と呼び(Cat. 5, 2a11-19)、さらに第一実体はこのもの(個体)を表示するのに対して第二実体はそうではなく実体にかかわる性質的なもの(性質のカテゴリーのものではなく実体のカテゴリーのもの)を表示するのだといって、両者を区別している(Cat. 5, 3a10-2)。なお、かれによれば、(a)は(d)なる基体のもとに語られるという仕方では存在し、(b)と(c)は(d)なる基体のなかに在るという仕方では存在するのであって、(d)が存在しなければ他のものはすべて存在することは不可能である(Cat. 5, 2b3-6)と言われる。したがって、(a)も(b)および(c)も(d)の存在を前提とし、(d)に依存して存在するということになる。

ところで、「或る基体のもとに語られる」という術語は、同じカテゴリーにおける個別と普遍ならびに普遍(種)と普遍(類)との組み合わせを表わすのであって(Cat. 3, 1b10-15)、(c)・たとえば性質のカテゴリーにおける普遍にあたる「白」は、(d)なる「基体のなかに在る」けれども、(d)なる「基体のもとに語られる」ものではないのであって、(b)のなかの性質のカテゴリーにおける個別にあたる「或る基体のもとに語られる」べきものであった(Cat. Cat. 2, 1a

29-30)。にもかかわらず、アリストテレスは、「この物体は白い」というように「その名前は (d) なる」⁽⁹⁾ 基体に述語づけられる」ことが可能であるという。もつとも、かれは、この人間に「人間」が述語づけられる場合にはその名前も定義もともに述語づけられるのに対して、「白」が述語づけられる場合にはその名前だけしか述語づけられないという仕方では、両者の述語づけられ方を差別している (Cat. 5, 2a19-34)。言い換えると、前者は自体的に述語づけられるのに対して、後者は付帯的に述語づけられるということになるだろう (cf. Cat. 6, 5a38-40)。しかし、たとえそういう制限つきではあっても、(d) には (a) だけでなく (c) もまた述語となりうることを、かれはここでみとめていることになる。

つぎは、「或る基体のなかに在る II に属する」ものではないとされている (a)、したがって (d) に属するものではないとされているはずの (a)、についてみることにする。さて、存在 II 実体とはなかが集散的に論じられている『形而上学』Z 巻において、普遍は実体であるかが問題とされている十三章では、第二実体に相当するような普遍もはっきり実体ではないと言われ、それはこれ⁽¹⁰⁾ ことを表示すると言ひ換えられている。「普遍的諸属性はなにもものも実体ではないことは明白であり、また、共通に述語となるものはなにもトデ・テイ (このもの) を表示するのではなくして、トイオンデを表示することは明白である」(1038b35-1039a2)。かくして、アリストテレス自身の考えの推移はあまり明瞭ではないとしても、われわれとしては、『カテゴリアイ』では「或る基体のなかに在る」ものではないとされていた (a) も、(b) や (c) とは同じ仕方ではないとしても、ここではやはり (d) なる基体「に属する II から離れて在ること不可能 II のなかに在る」とみなされると解することができるであろう⁽¹¹⁾。そして、(a) は (d) の自体的な属性であり、(c) あるいは (b) は (d) の付帯的な属性であるということになるであろう。

なお、(b) は (c) とは異なり個別であるから、もちろん (d) の述語とはなりえない。けれども、やはりそれは (d) の付帯的な属性にすぎないのであるから、(d) から離れて独立に存在しうるような個別として立てられているのではない。

以上を、第一義的に存在するものとされる(d)を中心にしてまとめると、(a)は自体的に、(c)は付帯的にはあるけれどもともに(d)の述語となるものであり、また、(a)は自体的、(b)と(c)とは付帯的であるけれどもともに(d)の属性であり、そして、(a)と(c)とは普遍であるということになる。

三・一 一 アリストテレス普遍論の認識論的背景

アローンはアリストテレスの普遍論にかんじて、つぎのように疑問を述べている。「諸々の個体がどういう仕方と実際にこの共通な属性をもっているのか。アリストテレスには満足な解答はない。その性質とは、多くの個体のなかで同一であるのか。それとも、別々な個体のなかの性質は互いに似ているのか。解答は明らかではない」(p. 10)

アリストテレス自身は、しかしながら、われわれは同一なものとしての諸々の普遍に達することができると考えていたのである。その主張はつぎのような認識論的考察にもとづいている。かれによれば (An. Post. B, 100a3-1b5) 感覚から記憶が生じ、同じ事物の記憶の積み重ねによって経験が生じ、さらに経験つまり「心のなかに定着したあらゆる普遍、多くのもの以外の⁽¹³⁾一なるもの、かの多くのものなかにおける同一なもの」から技術と知識がはじまる。したがって、われわれの知識はもともと感覚から発している。つまりかれはつぎのようなことが事実であると信じているわけである。「より低い種差に分けられない一個のものがそこにあるとき、すでに最初の普遍が心に現われる。

(というの)は、感覚の対象は個別であるが、感覚は普遍を内容とするからである。たとえば、感覚は人間を内容とするのであり、カリアスという人間を内容とするのではないからである⁽¹⁴⁾」。要するに⁽¹⁴⁾ロス⁽¹⁴⁾のいうように、個体の感覚(知覚)は同時に個体に現われている普遍の感覚(知覚)であるということであろう。かくして、アリストテレスは、われわれが種や類や最高の普遍としてのカテゴリーに達するのは感覚から出発して⁽¹⁵⁾帰納⁽¹⁶⁾によってである、と主張するのである。けれども、多くの感覚的個別的事物のなかに在り、しかも同一であるような普遍を、われわれは感覚のう

ちに把握することができるといえるのだろうか。思考と感覚とを混同しないかぎり、そのようなことは言えないであろう。⁽¹⁷⁾しかるに、他方述語論理学のなかの述語は、論証のなかで異なった主語の述語となっても、論理的に同一であるのだから、その述語によって普遍的属性が表わされると解する場合には、その属性もまた、主語によって表わされると解される諸々の感覺的個別的事物のすべてに共通な同一のものであることが要請されるのである。

このように、アリストテレスの普遍論には問題があるけれども、現代でも普遍の問題を取り扱う人々のあいだでは、イデアは普遍に相当するという解釈にもとづくかれのイデア論批判を基本的に受け容れる者のほうが多い。なかでも、イデア論を不合理とする『第三の人間』の論証は強い説得力をもっているのである。「普遍の問題については、アリストテレス自身の形而上学説はプラトンのそれに対する一つの進歩である」(G. I³)とみとめるアーン自身もその一人であろう。

三・二 現代論理学および集合論について

現代論理学および集合論は、周知のとおり、ごくおおまかに言えば、プラトンのイデア論を否定したアリストテレスによって体系化されたシュロギスモスと古代後期のストア派によって設計された命題論理学とを土台にして、G・フリーゲやB・ラッセルをはじめ多くの論理学者や数学者たちの協力によって、より厳密な形に増補改訂され大規模な公理体系として形成されるにいたったものである。現代の述語論理学および集合論は、基本的にはアリストテレス論理学の発展路線上において、かれのシュロギスモスのなかに組み入れられていない個別的言明をその体系のなかに組み入れ、さらにアリストテレスの実体(個体)とその属性(普遍)という存在論と結びついた論理的枠組ではうまく取り扱えなかった二項(多項)述語、つまり、ラッセルが大きくとりあげた関係名辞をも組み入れてあるわけである。したがって、われわれには、言明ないし命題の要素を記号化する方法としては、このような仕方形成された述語論

理学あるいは集合論しか与えられていないのである。そして、いわゆる普遍の問題は、一口に言えば、述語論理学における述語、集合論における集合によって表わされる対象がいかなるものであるかという問題に帰着することになる。そして、われわれはアリストテレスの見解についてはすでに検討した。今度はこの問題について、論理的意識を強くもっている現代のいわゆる分析哲学者たちの諸見解を検討することにしよう。ところで、述語論理学における述語は集合論における集合によっても表現することができる。⁽¹⁹⁾そこで、述語とはいかなる対象を表わすかを考えるかわりに、集合とはいかなる対象を表わすかを考えてもよいわけである。そして、そのほうが議論はいっそう明瞭になるであろう。

集合論はもともと数学であって、そのかぎりでは、集合とはいかなる対象であるかという解釈を問題にする必要はあまりないかも知れない。集合論の解説書にはその創始者とみなされているG・カントールが与えた集合の定義がよく引用される。「集合というのは、われわれの知覚や思考の対象でしかも区別のできる確定した対象 m を集めて、 M という全体にまとめたものである、と考えることにする(m は M の元と呼ぶことにする)」。したがって、われわれは、元つまり成員として、数であれ、感覚的事物であれ、なにか一定の無意味な記号であれ、このような定義にかなうものであればなにをとりあげてもよいし、それら成員の集合がいかなる対象であってもかまわないわけである。集合論において解釈が問題となるのは数とは何か、集合とは何か、といった問題が改めて立てられることによるのである。

三・三 ラッセル

ここでは、人間の集合を例にとつて、その定義をとおして、ラッセルにしたがった解釈が与えられた場合、それはどのような対象にあたるかを明らかにしよう。

それぞれの集合の定義の仕方としては、一般に、二通りの仕方がみとめられている。一つは、そのすべての成員を

枚挙する仕方で、これは外延的 (extensional) 定義と呼ばれる。もう一つはそれらの成員の特性 (property)、つまり、アリストテレスの属性に相当するものを述べる仕方で、これは内包的 (intensional) 定義と呼ばれる。そして、ラッセルによれば「これら二種類の定義のうちで、内包による定義のほうが論理的にはいっそう基本的である。〔中略〕(1) 外延的定義はつねに内包的定義に還元できる。(2) 内包的定義は理論的にもしばしば外延的定義に還元できないのである」⁽²⁰⁾。たとえば、自然数の集合というような無限の成員からなる集合を定義する場合を考えてみよう、というわけである。

ところで、人間の集合 M を外延的に定義しようとすれば、つぎのようになる。

$$M = \{m_1, m_2, m_3, \dots, m_n\} \quad \text{Df.}$$

すなわち、 M は $m_1, m_2, m_3, \dots, m_n$ の集合である ($m_1, m_2, m_3, \dots, m_n$ はそれぞれ個人の名前である)。このような定義は人間の集合の場合でも、成員の数が多すぎるので実用的ではない。そこでつぎのような内包的定義が用いられる。

$$M = \{x \mid x \text{ は人間である} \} \quad \text{Df.}$$

すなわち、 M は人間であるようなすべてのものの集合である。そして、ラッセルは内包的定義を基本的であると考える。このように集合を特性にもとづいて定義するラッセルの方法の背景にある哲学的思想はつぎのようなものである⁽²¹⁾。

- (1) まず多くの感覺的事物 (個体) が存在する (exist)。
- (2) それらはすべて人間であるという共通な特性 (普遍) をもつ。この特性は、個体が存在するというのと同じ意味ではないが、やはり存在する (または、自存する (subsist))。
- (3) それらすべての感覺的個体から人間であるという特性を抽象したものが集合である。

このような考えによつて、かれは「集合とは記号上の仮構 (symbolic fiction) 以上のもの」とみなすことを否定し⁽²²⁾

ながらも、それを「特性によっておきかえる」⁽²³⁾という仕方である。このことは「ただの図式、ただの枠組、意味を容れる空っぽの容器」⁽²⁴⁾とみなされている命題関数についても同様である。⁽²⁵⁾かくして、かれにとつては、「 m_1 なる個体は人間という集合の成員である」というのは、「 m_1 なる個体が存在し、それは人間である」という特性（普遍）をもつ」という事態の表現なのである。このような考えは、アリストテレスの普遍論と基本的に一致するであろう。⁽²⁶⁾現在ではラッセルは、アリストテレスの実体をしりぞけて、感覚的諸性質（quality）の束が個の事物のかわりになると考えているけれども、たとえば「赤」のような個別的性質（これをかれは実体と呼んでいる）に対しては「色」なる普遍的性質が別に存在することをみとめねばならないと考え、個体と普遍という二本立存在論路線をとる点⁽²⁷⁾では、やはりアリストテレスと軌を一にしているわけである。

三・四 クワイン

集合とはいかなるものであるかという解釈をめぐって、クワインはラッセルとの対立を示す。クワインは、ラッセルに反対して、集合を特性つまり属性 (attribute) によっておきかえることを拒否し、集合と属性とを論理的に区別しなければならぬと考えるのである。このことをつぎのような外延性の法則についてみることにしよう。

$$(\forall x)(x \in M \leftrightarrow x \in N) \rightarrow M = N \quad \dots \dots [M]、[N] \text{ は集合を表わす。}$$

しかしこの法則はつきのような場合にはなりたつとは考えられない。⁽²⁸⁾

$$(\forall x)(x \in F \leftrightarrow x \in G) \parallel G \parallel \dots \dots [F]、[G] \text{ は属性を表わす。}$$

たとえば、「 M 」に「人類」、「 N 」に「羽のない二足動物の類」を、「 F 」に「人間性」、「 G 」に「羽のない二足動物性」を、代入してみれば、明らかであろう。ところで、ラッセルの場合、集合は命題関数に、命題関数は特性に、という仕方である。集合は結局、特性におきかえられることになっていて、そして「set」などの式で示される命題関数の

「 ϕ 」は個体のほかに存在する特性なるものを値として取る量化可能な変項とみなされていることになるが、クワインの場合、この命題関数は「 Fx 」などの式で示される開放言明 (open sentence) として取り扱われ、「 F 」は量化可能な変項とはみなされないうで、ただの型述語文字 (schematic predicate letter) と呼ばれるのである。そして、 F であるようなすべてのもの集合 $\{x | Fx\}$ は記述詞を用いてつぎのように定義される。⁽²⁹⁾

$$\{x | Fx\} = (M)(\forall x)(x \in M \rightarrow Fx) \quad \text{Df.}$$

すなわち、すべての x について、 x が M の成員であることと x が F であることは等値であるようなそういう対象 M と定義される。

このようにして、クワインは集合については外延的定義のほうを基準にとるわけである。そして、「もしも諸々の属性「たとえば、人間性と羽のない二足動物性」が同じ諸事物「多くの個人たち」の属性であるときには、それら属性はつねに同一であるとみなす人がいるならば、その人はむしろ集合について語っているとみなさるべきであろう」⁽³⁰⁾ と述べている。しかし「述語を特性または属性というよりもむしろ単なる記法 (notation) と解するときには、私はないも唯名論的哲学を支持してはならず、ただ術語を整頓しているにすぎない」⁽³¹⁾ とも述べている。

現代の数学基礎論では、論理主義、直観主義、形式主義の三つの立場が区別されるのが普通である。クワインによれば、それらはつぎのように解説される。フレーゲ、ラッセルらの論理主義 (實在論) は、集合や集合の集合といった普遍ないし抽象体を個体以外の存在としてみとめ、それらを変項の値としてみとめる。ブラウウェルらの直観主義 (概念論) は、あらかじめ指定された要素から構成可能なかぎりで、つまり、一定の有限な手続きによって集合が成員から直観的に構成可能であるかぎりでその存在をみとめ、それを変項の値としてみとめる方策を承認する。ヒルベルトらの形式主義 (唯名論) は、抽象体を存在としてみとめず、集合論それ自体は無意味な記号的演算である⁽³²⁾ とみなす。クワイン自身は直観主義が方策としていちばん強力であると考えている。⁽³³⁾

さらに、クワインは、まず存在する個体としては、ラッセルのように個別的感質的性質を立てないで、物理的対象を立てる立場をプラグマティックな観点から採って、⁽³⁴⁾特性とかさらに意味とかいう普遍の存在を個体のほかの存在として承認することはしないのである。⁽³⁵⁾ [未完]

(筆者 京都大学文学部〔西洋哲学史〕助手)

- (1) アリストテレスは、シュロゴシモスにおける取り扱いに関連して、(1)主語となるものか否か、(2)述語となるものか否かという基準によって、存在するものどもを、つぎの三つのグループに分けている。(a) || (1) yes. (2) no || 個別 (たとえば、クレオンとかカリアスとか個別的感質的事物)。(b) || (1) no. (2) yes || 諸カテコリー。(c) || (1) yes. (2) yes || 種や類などの普遍 (たとえば、人間とか動物)。そして、言論と研究はほとんど(c)グループのものにかかわっていると云ふ(An. Pr. A27, 43a 25-43)。かくして、かれのシュロゴシモスでも、ばらこの(c)グループのものを表わす名辭が取りあげられているのである。なお、(b)グループとしたのは、「それら自らは他のものものと述語づけられるが、他のもののほうは、それらのもとによりさきに述語づけられなく」といわれてゐるものであるが、例は示されてゐないのである。W. D. Ross ("Aristotle's Prior and Posterior Analytics" 1949, p. 384)によれば、それらは最高の普遍、つまり、諸カテコリーにあたることを解かれ、J. Lukasiewicz ("Aristotle's Syllogistic" 2nd ed. 1967, p. 5)によれば、それらは存在(ナ・オン)のようなものと普通のものにあたることを解かれてゐる。けれど、G. Patzig ("Aristotle's Theory of the Syllogism" [J. Barnes 英訳] 1958, p. 5)は明確な理由によって諸カテコリーにあたることを解してゐる。私は Ross, Patzig に従つた。
- (2) 現代的に言えば、量化記号のついていない言明。
- (3) アリストテレスは「属する」を、現代では集合論で成員と集合との関係として取り扱われようするような関係の表現として用いている場合がある。たとえば、『カテコリアイ』(5, 2a 13-17)の「この人間(第一実体 || 個体)が人間(種 || 普遍)に属する」ところで、目下の箇所の「属する」 || 「述語づけられる」という関係は、現代では集合論で、包含の関係に対応するもの(もっとも「包含される」とは逆の「包含する」ではあるけれども)として、両者は現代的観点からすれば、論理的にはっきり区別される。けれども、アリストテレスはこの点についてはあまり明確に区別していないように思われる。
- (4) たとえば、7, 17b 28 および 18a2 に「ソクラテスは白くある」という個別的言明が、論理的観点から取り扱われている。

- (5) 「カテゴリーメノン」という語そのものは、たとえば、「はじめに」の註5の箇所、本章の註10を付した箇所などに見出される。なお、アリストテレスは、かれの論理学および存在論特有の術語として用いる「カテゴリースタイ」、「カテゴリーメノン」とは別に、日常言語で普通われわれが述語(主として動詞)と称しているのに相当するレーマについても論じている(De Int. 3, 16b6-19)。しかしこの語は、アリストテレス論理学では重要な役割を演じていないので、本稿では特別に問題にしないでおく。
- なお、アリストテレスは、「ト・カトルー」とカテゴリーメノンと発言して、記号によって表わされる対象(存在するもの)としての普遍 \equiv 述語となるものから、記号としての普遍名辞 \equiv 述語をはきり区別している。註1の箇所や、De Int. 17a 38-39を参照。なお、この点については、さらに、Lukasiewicz (ibid., p. 6) および Patzig (ibid., p. 5) を参照。
- (6) アリストテレスは、この基準によって実体のカテゴリーにおける種や類を個別から区別するだけではなく、ほかのそれぞれのカテゴリーにおける種や類を個別から区別している(Cat. 2, 1 a 29-b3)。cf. Ackrill, J. I., "Aristotle's Categories and De Interpretatione" 1963, p. 75.
- (7) 「Bが」基体「A」のなかに在る」とは、アリストテレスによれば、「Bが」或るもの「A」に部分としてではなしに属する(ヒュパルケイン)のであって、それ「B」がそのなかに在る当のもの「A」から離れて(コーリス)在ることが不可能である(Cat. 2, 1a24-25)としよう意味があると説明される。cf. Ackrill (ibid., p. 74)。
- (8) Ackrill (ibid., p. 74) および藤沢令夫教授・研究講義『論理学と形而上学』1966。(一月二四日)参照。
- (9) なお、実体に第一実体と第二実体が立てられているのは『カテゴリーA』においてだけであることが知られている。
- (10) cf. 「普遍的に語られるものは、なにであれ実体であることは不可能であると思われる。というのは第一に、個々の事物の実体はその事物に固有なものであり、他の事物には属さ(ヒュパルケイン)ないが、普遍は共通なもの(コイノン)であるから。というのも、本来数多くのものに属するものが普遍的に語られるからである。〔中略〕さらに実体はいかなる基体のもとにも語られないが、普遍はつねに或る基体のもとに語られるのである」(Met. Z13, 1038b8-16)。
- (11) 藤沢(上掲研究 1966. 五月三一日)参照。
- (12) Aaron R. I. "The Theory of Universals" 2nd ed. 1967.
- (13) 「以外の」 $\tau\omicron\upsilon\lambda\lambda\omicron\upsilon\theta\omicron\varsigma$ は「*rapá*」ではなく、「*ypó*」 \equiv 「離れて」という意味ではなく。
- (14) Ross, ibid., p. 678.
- (15) アリストテレスによれば、科学的知識や論証の原理へとわれわれが達するのは、帰納によってであり、原理を把握するのは

は直知(ヌース)だとされる。演算(ロギクモス)は誤りえても、直知はつねに真なのである。(An. Post. B 19, 100b3以下)このように帰納は論理的手続きではない。

(16) なお、アリストテレスにとっては、抽象的に語られるもの(主として数学的对象)は普遍であつて、これも帰納によつて知られるものとなるとされる(An. Post. A 18, 81b2-4)。そして、これもまた感覚的事物の属性でもある(Met. K4, 1068a28-83)。

(17) 「在る」、「同じ」、「異なる」、「似てゐる」、「似てゐない」、「さらには「美しい」、「醜い」、「よい」、「わるい」などは、感覚だけによつては判別できない」ということについての詳しい議論は、プラトンの『テアイテトス』(184b-186e)を参照。他方、アリストテレスは五官に共通な「共通感覚」と称されるものをみとめ、この感覚によつて、上述のことを判別できると主張してゐる(De Anima, 425a17, 426b17-29)。そしてたとすると、多くの個物に共通な普遍的属性の同一性を「われわれは感覚によつて判定できることになるが、これではやはり思考を感覚のなかに持ち込んで両者の混同を許すことになるのではあるまいか」(18) たしかにプラトンのイデアはこのように解釈されうる側面をもっている。たとえば、Rp. 586a (1の註5)参照。かくして、ラッセルはイデアと普遍とを容易に同義語として用いることができたのである(“The Problems of Philosophy”, 1912, Ch. X)。かれにとっては、その数学的表現が「集合」であり、論理的表現が「命題関数」にはかならなう。

(19) 述語論理学および集合論における代表的な記号的言明を選んで、その例として与えられうる日常言語的言明を付記しておく。「&」は連言を、「 \rightarrow 」は含意(条件)を、「 \leftrightarrow 」は等値(双条件)を、それぞれ表わす言明結合記号。「 \forall 」は全称量化記号、「 \exists 」は存在量化記号。「a」、「b」は特定の個体、「x」、「y」は個体変項、「F」、「G」は述語、「R」は関係(順序対の集合)。「M」、「N」は集合、をそれぞれ表わす記号。「 \in 」は「に属する(belongs to)」、「の成員(member)である」という集合論における成員と集合との関係を、「 \cup 」は「に包含される」(is included in)、「の部分集合(subset)である」という包含の関係を、「 \cap 」は集合と集合との積(product [共通部分(intersection)])をそれぞれ表わす記号。

(A) 個別的言明

(A 1・1) 述語論理学における記号的表現…Fa

いま、「M」を「 $\{x|\exists x\}$ 」(Fであるようなすべてのものの集合)と定義すると(A 1・1)は(A 1・2)によつて表現される。

(A 1・2) 集合論における記号的表現… $\exists xM$

(A1・例)「ソクラテスは人間である」、「ソクラテスは白い」など。
 (A2・1) $\dots \text{Fab}$

「R」を「 $\{x \mid \text{F}x\}$ 」、「F」であるようなすべての順序対 $\langle x, y \rangle$ の集合」と定義すると、(A2・1)は(A2・2)によって表現される。

(A2・2) $\dots \langle a, b \rangle \in R$

(A2・例)「シミアスはソクラテスより大きい」など。

(B) 全称的言明

(B1) $\dots (\forall x)(\text{F}x \rightarrow \text{G}x)$

「M」を「 $\{x \mid \text{F}x\}$ 」、「N」を「 $\{x \mid \text{G}x\}$ 」と定義すると、(B1)は(B2)によって表現される。

(B2) $\dots M \subseteq N$

(B例)「すべての人間は動物である」など。

(C) 特称的言明

(C1) $\dots (\exists x)(\text{F}x \ \& \ \text{G}x)$

「M」、「N」をそれぞれ同様に定義すると、(C1)は(C2)によって表現される。

(C2) $\dots M \cap N$

(C例)「或る人間は白い」など。

集合論における成員の關係と包含の關係とのあいだにはつきのような等値がなりたつ。

(1) $M \subseteq N \leftrightarrow (\forall x)(x \in M \rightarrow x \in N)$

また重要な原理として、このような集合の同一性の原理、いわゆる外延性の原理 (the principle of extensionality) がある。

(2) $M = N \leftrightarrow (\forall x)(x \in M \leftrightarrow x \in N)$

要するに、同じ諸成員からなる集合は同一であるということである。したがってまたつききの定理もなりたつ。

(3) $M \subseteq N \ \& \ N \subseteq M \leftrightarrow M = N$

成員の關係と包含の關係との相違は、基本的な点だけを言えば、集合はその成員よりも論理的タイプないし階層が高く一段階抽象的なものである(なお、成員となるのは基本的には個体であるが、或る集合もまたそれより一段階抽象的な集合の成員と

- なりである)のに対して、或る集合 x の部分集合とは論理的 λ テンが同じなの ρ である。cf. Quine, W. O. V. "Method of Logic" 2nd ed. 1959, § 42, Suppes, P. "Introduction to Logic" 1957, esp. pp. 177-182.
- (20) Russell, B. "Introduction to Mathematical Philosophy" 1919, p. 12.
- (21) cf. B. Russell, *ibid.*, (1912) Ch. X, pp. 101 ff. & "My Philosophical Development" (1959) pp. 178-9. なお、シャルは「これらの箇所では「性質」とか「関係」として扱われる普通について語っていて、人間というような普通について語っているのではなく、私が問題にしてゐるのは、その考え方の枠組であるので、便宜上、人間を例とした。
- (22) Russell, *ibid.*, (1919) p. 184.
- (23) Russell, *ibid.*, (1959) p. 158.
- (24) Russell, *ibid.*, (1919) p. 157.
- (25) Russell, *ibid.*, (1959) pp. 69-70.
- (26) 「本質とか性質とか量とかなにかはかものものは、思考(ディメンシア)が〔中略〕抽象する(アバイレイン)のである」(Met. E4, 1027b31-33)。「よかなる事物(ノラーツマ)も〔中略〕感覺されるものから離れて独立に存在しなうのだから、思惟 α なる ϕ 、抽象的に語られる α の感覺されるものを持ち前や状態などのすべても、感覺されるものの形相のうちには存在する ρ である」(De Anima. F8, 432a3-6) など。
- (27) Russell, *ibid.*, (1959) pp. 160-165, 170-171.
- (28) Quine, W. O. V. "On Frege's Way Out" 1955, Selected Logic Papers, 1966, pp. 146-158. 再録、pp. 147-148. ただし「 ρ 」 ρ の中 α の ρ は「 ρ 」 ρ の中 α の ρ と異なる。
- (29) $(x)(\alpha x \equiv \alpha x \beta) \supset \alpha = \beta$
- (30) $(x)(\phi x \equiv \psi x) \supset \phi = \psi$
- (31) Quine, *ibid.*, (1959) p. 230. $\hat{x}Fx = (\alpha)(x)(\alpha x \equiv Fx)$ DF.
- (32) Quine, W. O. V. "Set Theory and its Logic" 2nd ed. 1969, p. 2; cf. *ibid.*, (1959) p. 204.
- (33) Quine, *ibid.*, (1969) p. 9.
- (34) Quine, W. O. V. "From a Logical Point of View" 2nd ed. 1961, pp. 14-15.
- (35) Quine, *ibid.*, (1961) pp. 127-9. なお、ノットマン α もまた構成員(constructive)である ρ である ρ 、かれが λ 、 λ も ρ である

ッテルとして与えた「プラトニズム」の立場とは異なるが、構成せられるかぎり集合という普遍、つまり、抽象体を変項の値としてみとめる点で、広い意味ではやはりプラトニズムであるとも言える。Küng, G. "Ontology and the Logistic Analysis of Language" 2nd ed. 1967, p. 146. 参照。

(34) Quine, *ibid.*, (1961) pp. 17-18, p. 44.

(35) Quine, *ibid.*, (1961) pp. 10-11.

前号論文目次		
逸脱の行為—状況理論……………中		久郎
知覚理論における機能主義の 展開と知覚の問題……………大		羽 葵
ブロンデルの『行動(1893)』 に於ける認識と存在との関係…長		谷 正 当

次号論文予告		
無からの創造……………山		田 晶
観念・性質・実体 —ロツクの場合……………土		屋 純 一
普遍の問題……………浅		野 檜 英
ベルグソンの形而上学と科学…筒		井 文 隆